

第6回

「投稿論文の査読者への対応に関して」

笹野公伸

東北大学大学院医学系研究科病理診断学分野教授

前回はいかにして投稿論文を査読者に回せるようにすればよいのか？ということ解説したが、今回は論文が査読に回り査読が戻ってきた際の査読者のコメントへの対応をどのように進めればよいのか？ということに関して触れてみる。現在筆者は前回記載した複数のジャーナルで平均して週に4-5報の投稿論文に目を通し、その多くで査読者を選択しているがこの経験を基に今回は記載する。以下の点に関してほとんど解説されることはないが、論文を投稿する者にとっては重要である。しかし出版社/ジャーナルにより当然編集方針は異なるわけであり、あくまでも個人的な経験に基づくとあらかじめ断りを入れさせてもらう次第である。

投稿論文で査読者の指定は有効か？

編集者への手紙で査読してもらいたい者、逆に競合相手などでしてほしくない者を記載すべきかどうか悩むことがあるのではないだろうか。一昔前までは基本的にこの点で筆者の希望を叶える編集者が多かったのは事実である。しかし現在では、査読者の選定にはその論文のkey wordをAIのようなプログラムで選択し、その類似の研究をここ数年で発表した論文のcorresponding authorsが自動的にリスト化され、研究内容の関連を示す指数、そのジャーナルの査読経験、査読の評価(査読日数も含む)、同じ機関で勤務しているか否か？過去に共著者である論文があるのか否か？など査読者候補のリストが個々の投稿論文で自動的に出てくる。そうするとどうしてもこのリストのなかで関連指数が高く、いわゆる conflict of interest (COI) が

なさそうな査読者を選択せざるをえなくなる。こうなってくると投稿者が記載した希望するあるいは希望しない査読者はあまり意味をなさなくなる。このシステムは一見透明性が高いようにも思われるが、関連する研究領域でも査読を引き受けるかどうかは別問題となる。特に最近ではいわゆるオンラインジャーナルが雨後の筍のように増えてきており、査読者も余裕がない状況が増えてきている。そうするとその論文はいわゆる“彷徨えるオランダ人”あるいはセントルイス号のような“さすらいの航海”と同じ状況になってしまい、私自身も月に数報はこのような投稿論文を経験し、それなりの時間をとられてしまう。こうした場合には正直、どうしても“顔の見える”査読者か、投稿論文の筆者が指定してきた査読者候補をCOIがないことを確認してから選んでしまう。

以上より現時点では論文投稿時の手紙には、選ばれるかどうかはさておき希望するあるいはしない査読者の氏名と連絡先を記載しても決してマイナスにはならない。しかし当然のことであるが、共同研究者、同じ研究室にいた者などを希望する査読者に記載してしまうと論文自体に疑いがもたれることになり注意が必要となる。

投稿論文の査読が遅れている場合の問い合わせ

現在多くのジャーナルではオンラインで査読に回ってどのくらいの期間が経っているのかを投稿者は知ることができる。通常査読者への査読の期間は2-3週間くらいであるが、この期間を超過することも決して少なくない。本来であれば超過した査読者にはいわゆる